

## 5. 河川の利用

### (1) 農業用水

高津川流域で利水の歴史を見ると、幕藩時代より本格的に始まっている。それによると近世の利水目的はほとんど農業用水の確保にある。特に津和野藩の農業振興政策では高津川の豊富な水資源が注目された。

#### ① 蟠龍湖疏水

高津川下流左岸側の沖田地区は一里ほど離れた市原から水を引いていたが、洪水により水路がしばしば破壊されるなど用水の便は今一つであった。また、浜地区では蟠龍湖より開削水路を引いていたが、砂質地のため疎通が悪かった。宝永元年（1704）頃、高津の庄屋に赴任した永嶺嘉左衛門は地形的に蟠龍湖から沖田地区への取水が可能と判断し、津和野藩に疏水工事を願い出、許可された。こめ工事は全て人力だけに頼り、数年にわたる苦辛の末、宝永4年（1707）に竣工した（図4—23）。この疏水工事により、沖田の地は良田と化し、用悪水路を通じて浜・下開作地区までがその恩恵を掌けた。



図4—23 蟠龍湖疏水工事  
(資料：「地域社会と河川の歴史」)

#### ② 大庭又三郎の開作

大庭又三郎は日原町青原の出身で近世中期の著名な土木工事技術者である。延享4年（1747）、冬、津和野藩より木原・安富など4ヶ所の開作を目論ませられ、木原に水を通すためトンネルを掘るなどの難工事で4年後に完成した。この工事に

より面積 10 町余、40 石を産する新田が拓かれた。宝暦元年（1751）から大滝の永否地を 12 年かけて復旧し、年貢米 13 石を産する良田とした。また、宝暦 3 年（1753）の水害で大破した横田村下市および隅村の水除を翌 4 年に復旧させ、その功勞により藩から米 3 俵の褒美をもらった。

明和 2 年（1765）には三星村から寺垣内村の新田への溝を完工させ、同年藩より命を受けた蟠龍湖の塞き止め工事を完工し、翌 3 年（1766）には横田村・寺垣内村・隅村の荒地を開発した。翌 4 年（1767）には甘子に水車を設け、高津まで溝を引く疏水工事を竣工した。同年横田村の川べりに水勿を作るため石垣を築いた。

以上の他にも又三郎の手懸けた土木工事は多く、安永 7 年（1778）に逝去するまで津和野藩の発展につくした。

### ③井 堰

新田開発に欠かせないものは水利・灌漑の整備であることは言うまでもないが、津和野領の水田は谷懸かりが古田、井手懸かりが新田であるといわれる。高津川の井堰に関する資料は少ないが、「日原町史」には高津川・津和野川沿いの井堰の記録が残されている（表 4-11）。そのうち近世の代表的井堰について以下に述べる事とする。

その記録に残る最も古い井堰は「野口の井手」と称するもので「糶屋の背度にあった（日原村聞書）」と伝えられる。中世末期迄に建設され、少なくとも元禄 10 年（1697）までは野口の水田がこの井手によって灌漑されていたという。「松ヶ瀬井手」は曾庭の治右衛門という人物が計画し、享保 8～16 年（1723～31）に前述した大庭又三郎により建設された。この井堰の建設にあたっては「たたみこし」と呼ぶ杵を据えて大きな石を畳み込んだ。大井堰の水路は長さ 3,000 間余といわれ、

表 4-11 日原町の井堰・堤（昭和 4 年現在）

水 系 名	井堰及び堤名称	灌漑地域	灌漑反別	
津和野川	東岸	直地井手	倉地	50
		突出シ井手	小用	20
		井谷尻井手	芝	40
		落合カケ井手	枕瀬	50
高津川	東岸	大谷堤	木ノ垣	30
		木ノ垣井手	大島	60
	西岸	越原井手	小直・木ノ口上	120
		小直下井手	木口	70
青 原 堤		観音のカケ	木口・新地・野口	170
	東岸	松ヶ瀬井手	脇本・三波	240
	西岸	鶴岩井手	曾庭	90
細 の 堤		青原堤	青原	80
	大堤	滝ノ上	畑	427
		滝ノ下		
		中ノ堤		
奥ノ堤				
	その他の小堤		30	
	谷 川		10	

（資料：「日原町史」）



松原堰

これによって田5町7反余、畠3町9反余が開墾されたという。また、同じ時期に大庭又三郎が築いた井堰に野口村の「鶴岩井手」がある。これは延宝の頃（1673～）までに建設されていたものを享保8～16年（1723～31）に増築したものでその灌漑水路の長さは2,280間に及んだが、天保7年（1836）の大洪水によって消滅した。

現在、直轄管理区間内にある井堰は4ヶ所あり、このうち3ヶ所が取水目的のものである。匹見川の剣先堰は昭和10年の水害で従来の施設が流失したものを昭和14年に復旧したもので、現在は横田・安富・神田地区に農業用水を供給している。高津川左岸の卯の木堰は大滝・向横田地区に農業用水を供給している。白上川の

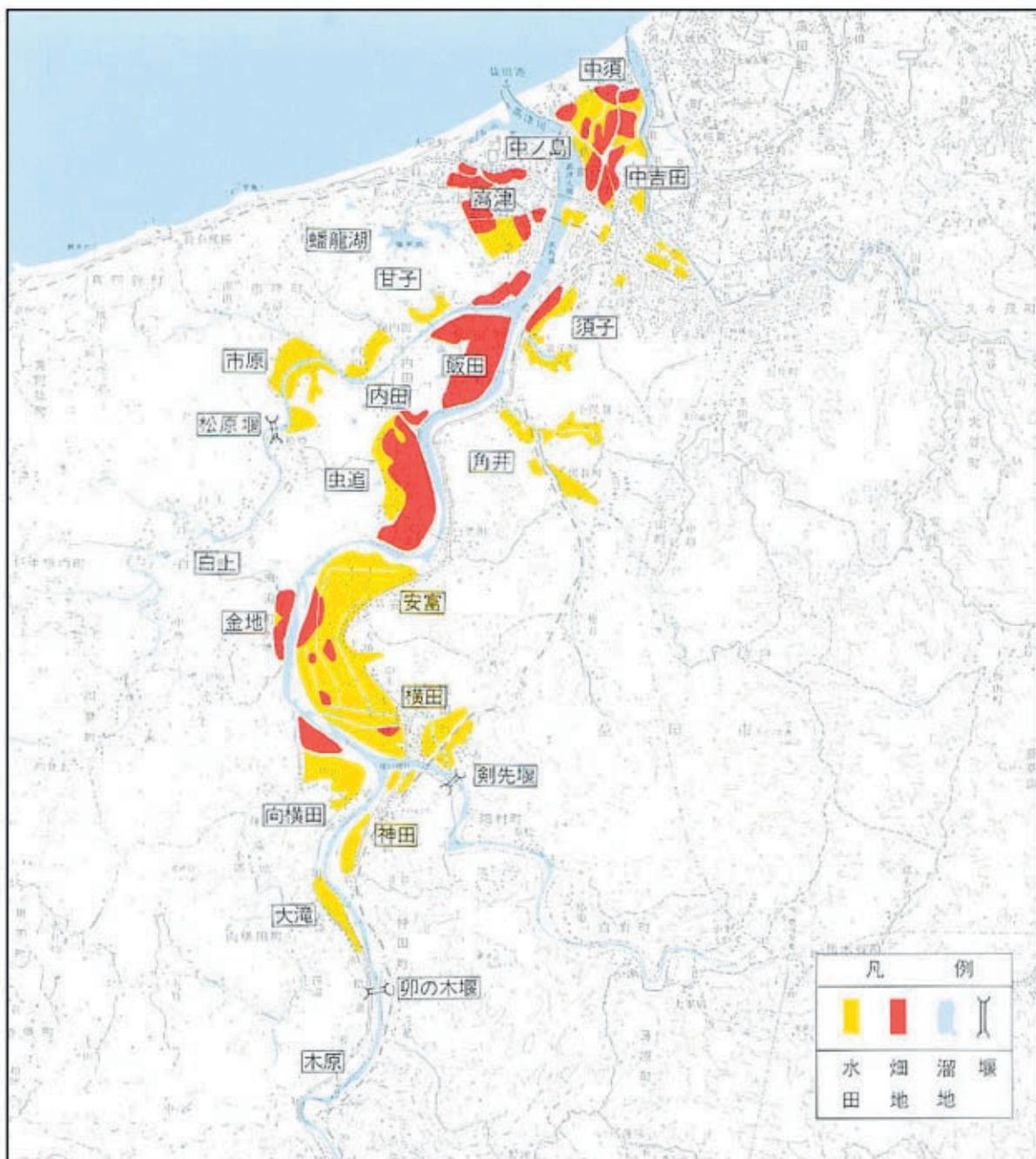


図4-24 高津川下流の主要水源と農地分布図

(資料：中国地方建設局「地域社会と河川の歴史」)

松原堰はゴム引布製起伏堰（洪水時は空気を抜く）で市原地区に用水路が通じている（図4—24）。

## (2)舟 運

### ①近世幕藩時代

高津川では古くから舟運が開けていたが、本格的に発達したのは津和野藩亀井氏の時代からである。本拠が山間部にある同藩では発展のためには交通整備が欠かせないと考え、自領内に高津川河口を開削して港（高津港）を設け、水上交通を発展させた（図4—25）。

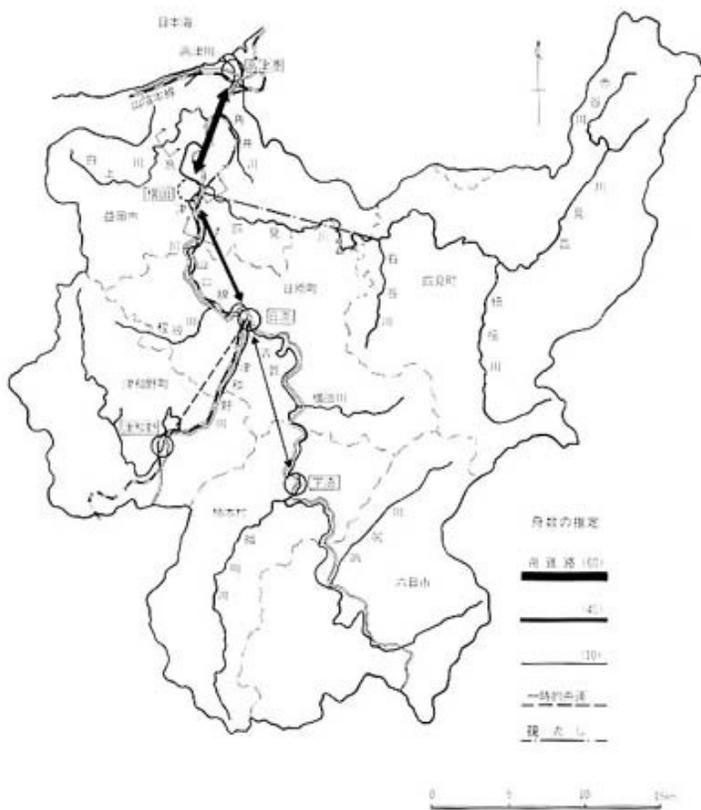


図4—25 近世の舟運模式図  
（資料：「地域社会と河川の歴史」）



図4—26 明治年間の高瀬舟の舟着場  
（資料：「日原町史」）

高津川の舟運の範囲は高津港から上流は津和野港、下須港（柿木村）に達しており、人員や物資を輸送する舟は「高瀬舟」と呼ばれた。さして人口の多くない高津川上流部の下須まで舟運が発達しているのには軍事的な理由がある。小藩である津和野藩は軍備を増強する必要があるが、そのためには製鉄業を発展させて武器を多く生産せねばならない。また製鉄業には膨大な木炭が必要であり、炭材の宝庫である枕瀬より下須にかけての山林が注目されたのである。鉄の材料である砂鉄は那賀郡の井野村から海路高津に運ばれ、そこから高津と下須の間である枕瀬の製鉄所に運ばれた。また高津には鍛冶屋もあり、枕瀬で铸造された鉄材

をここに運んで製品化したとも考えられる。こうした鉄材・木材の他には石見半紙・米などの農産物・塩といったものが運ばれていた。

津和野川の舟運は河流の巨石割除工事を行なった後、貞享4年（1687）に始まり、元々は年貢米の廻送と役人の出張の足として利用されていた。しかし宝暦11年（1761）蠟座が津和野城下から高津へ移転してからは櫛実の集荷輸送が主となった。明和7年には枕瀬に櫛中場が開設され、櫛実の集荷体制が整えられた。また、津和野川では高津人丸社の八朔祭など臨時の人出の他は一般客による利用は僅かであったという。

渡舟については古来より各地にあったはずだが、近世において記録として残っているものは少ない。「日原町史」によれば町内だけでも津和野川沿いに1ヶ所、吉賀川沿いに2ヶ所、高津川沿いに5ヶ所、匹見川沿いに2ヶ所の渡場があったとされている。また、「柿木村史」によれば津和野からの参勤交代路の途中に「柿木渡し」と呼ばれる渡場があったという。

このように津和野藩の発展に貢献した高瀬舟は津和野藩では株制度になっていたとの記録がある。幕末における高瀬舟の数は吉が下領6、枕瀬32、青原26、横田18、高津41（渡舟を含める）となっている。高津川・津和野川の舟運は度々の洪水により河床に大岩が堆積し通行が困難になり、年々規模を縮小していく。

## ②明治・大正時代

高瀬舟は明治年間に入ってから高津一枕瀬間を中心に引き続き重要な物資の輸送手段であった。「益田市史」によれば、明治27年から大正13年に至る約30年間に横田・安富は40～60艘の高瀬舟が高津・横田・枕瀬間を上下往来し、諸物資を運搬していたという。「日原町史」の古老の話によれば、高瀬舟の積荷の内容は上り荷が米、下り荷が炭・板・櫛などでその重さは約500貫あり、枕瀬で降ろされた木炭は笹ヶ谷の銅山まで馬で運ばれたという。また高津からの上り舟は帆を掲げて通行し、時には10艘に及ぶ舟が真っ白な帆を上げて川を上る光景が見られたという。図4—26に高津川上流部の主な船着場を示す。

高瀬舟の他に物資の輸送船としてダンベイと呼ばれる石舟があり、主として井堰・堤防工事用の石材を運んでいた。また匹見川では、浜田県が置かれた明治8年に匹見村から高津までの上下輸送の便（匹見通船会社）が益田の土田古栄によって開かれた。この時の河川疏通路の工事は極めて難工事であったという。

渡舟は橋梁の完成によりその数を少しずつ減らしていくが、明治初期には多くの渡舟があった事が確認されている。下流部の渡舟は、中ノ島～高津浜間、須子～高津間、角井～飯田間、安富～金地間にあり、中でも角井～飯田の渡しは飯田

橋の完成する昭和の半ば頃まで庶民の重要な足であったという。中流部の日原付近では青原、三渡、小瀬、口屋、日原、枕瀬、左鐙などに渡し場があり、匹見川では須川谷に渡し場があった。

こうした水上交通は陸路の道路や橋が整備されるに従ってその数が減っていき、大正 12 年は山口線が開通すると高瀬舟の姿は見られぬようになった。ただ、木材を運ぶ筏流しだけは昭和 18 年頃まで見られたという。